

『純粋理性批判』における経験の根拠についての考察
—超越論的統覚と理性概念の再検討—

論文審査の結果の要旨

本博士論文は、カントの『純粋理性批判』(以下『批判』と略記)における認識論を、感性と悟性の二元性のレベルからのみ理解するのではなく、認識成立のさらなる根拠へと遡源することによって、感性と悟性の二元論という従来のカント解釈の問題に新たな光を照射し、それによってこれまでの解釈の一面性を暴露している。そのために本論文は、二つの観点から『批判』における経験のさらなる根拠を考察する。第一の観点は、『批判』前半部の「超越論的演繹論」における統覚概念の再検討であり、これは本論文第一章から第三章において論じられる。第二の観点は、従来のカント解釈において消極的意義しか認められてこなかった『批判』後半部の「超越論的弁証論」における理性概念すなわち理念について、カント認識論にとってそれが持つ積極的意義を別決することであり、これは第四章から第六章において展開されている。

第一章では、『批判』第一版の「演繹論」において提示される感官と構想力と統覚という三つの主観的認識源泉と、感性と悟性という二つの客観的認識源泉との関係について考察する。

第二章では、主観的認識の三源泉と客観的認識の二源泉の関係についてさらに立ち入って追求する。それによって次の二つのことが明らかになる。第一に、感性は感官に、また悟性は統覚に対応していること、第二に、主観的認識源泉の一つである構想力が、感性と悟性という客観的認識の二源泉よりもさらに基層で作動しているということである。しかしながら『批判』第二版の「演繹論」では、構想力は根源的な能力というよりもむしろ、悟性即ち統覚に属する能力と位置づけられている。

そこで第三章ではまず、悟性と同一能力と見なされた統覚概念を再検討する。それによって統覚は、一方で根源的統覚として感性界全体と関わっており、他方で悟性即ち超越論的統覚として客観的認識を構成する能力であることが明らかになる。次に、この結果を踏まえながら、第二版「演繹論」における構想力の根源性からの退避が持つ意味を考察する。それによって、根源性からの構想力の退避に代わって、第二版「演繹論」では根源的統覚が未規定的かつ全体的な場を開く能力として捉えられていることが際立ってくる。

第四章では「弁証論」の積極的な意義について考察する。従来のカント解釈は、「弁証論」の主たる目的を独断的形而上学への批判にのみ求めていたが、しかしながらそれにとどまらず、理念としての魂や世界や神の積極的な意義を「弁証論」から読み取ることができる。

第五章では、理念と根源的統覚との関係を追求する。根源的統覚は客観的認識を構成する悟性に先立ってすでに作動しつつ全体的な場を開く能力である。そしてこの全体的な場に関わりつつ、理性が悟性に対して企投するのが理念である。

第六章では、理念の積極的な意義についてさらに考察を進める。感性的直観の多様の総合統一によって悟性は客観的認識を構成するのであるが、こうした悟性活動が経験のより高次の条件へと遡源していこうとするのは、あらかじめすでに理念としての認識の全体性が悟性に課せられているからである。悟性に対する認識の全体性への統制こそが理念の積極的意義なのである。

以上のように、本論文は、感性と悟性の二元論の問題に対して根源的統覚や理性の立場から新たな光を投げかけ、それによって従来のカント解釈の一面性を指摘し、『純粋理性批判』における経験の根源的な根拠を解明している。

よって本調査委員会は、本論文の提出者が博士(文学)の学位を授与されるに十分な能力を持つものであると認めるものである。